

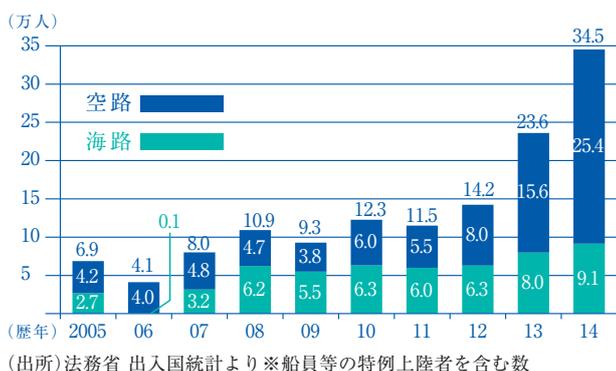
統計で見る観光市場・台湾

沖縄とは地理的にも近く、歴史的にも繋がりの深い台湾。沖縄とは現在も交流が活発に行われており、今後とも良好な関係が期待される地域といえるだろう。そのような台湾マーケットを、日本と台湾、両者の統計を用いながら概観したい。

台湾客の入域数は堅調

2014年、沖縄に入域した台湾人の数は過去最高のおよそ34万5千人であった(図表1)。前年比46.2%の増加で非常に好調といえるだろう。同年、沖縄に入域した外国人数(全体)がおよそ76万人であったため、入域外国人における台湾人のシェアは45.4%と高く、外国人のおよそ半数は台湾人という状況だ。

図表1: 沖縄への入域台湾人数推移



入域者数の推移をみると、特に日台間の航空路線の拡充を図った2011年のオープン・スカイ協定締結後からの伸びが大きい。協定締結以前、那覇と台湾を結ぶ定期便は中華航空1社のみであったが、路線拡充が進んだ2015年10月現在、台湾路線には5社が参入しており、週47便が就航している。

多くが空路で訪れている一方、クルーズ船による入域も着実に増加している。2014年では9.1万人となっており、シェアでいえば、来沖する台湾人客のうち26.4%がクルー

ズ船でやってきているということになる。

なお、ことしは昨年以上にクルーズ船の寄港回数が増える見通しで、さらに多くのクルーズ客来訪が期待されている。このように、沖縄における台湾人客の受入れ状況は非常に順調に推移しており、ことしも過去最高を記録するとみられる。

年間出国者数は1,184万人 出国率は日本の倍以上

ここで台湾における出国者統計から日本・沖縄をみてみたい。台湾から出国する台湾人出国者数は、2007年のリーマン・ショック後に低迷がみられたものの、現在は回復し増加傾向にある(図表2)。2014年の実績ではおよそ1,185万人で、出国手段の空路・海路の割合では、空路が94.0%、海路が6.0%となる。

図表2: 台湾における年間出国者数の推移



出国者数の多寡をみるため、出国率(出国者数を人口で割った値)に目を向ける。日本旅行業協会によると、台湾の出国率は、43.9%(2012年)となっている。沖縄近隣のアジアの出国率をみると、中国は19.3%、香港は108.9%、韓国は

27.5%となっている。台湾は島国であり、他国と陸続きではないということ考慮すれば比較的大きな数値といえる。

ちなみに、同年の日本の出国率は14.5%、沖縄については、4.7%程度(2014年、那覇空港の出国者数のみから筆者算出の参考値)となっている。

全出国者のうち2.9%が沖縄へ

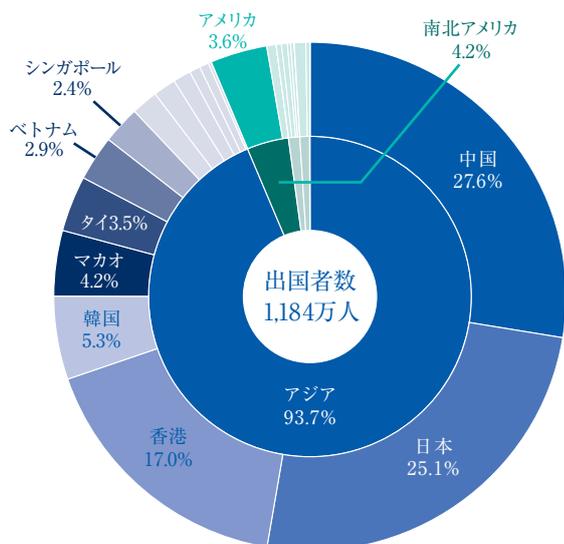
2014年の台湾における出国先をみると、そのほとんどはアジア(93.7%)である(図表3)。国別順位では、第1位が「中国」(27.6%)、第2位が「日本」(25.1%)、次いで「香港」(17.0%)となっている。ちなみに、日本へ訪れている人数はおよそ297万人となっている。

台湾からの出国者の4人に1人が日本に訪れている状況が分かったが、沖縄のシェアはどうだろうか。図表1における沖縄への入域数を用い、台湾の全出国者数における沖縄入域のシェアを算出した値は2.9%となった。(なお、同様に、訪日台湾人における沖縄を訪れる割合を算出した結果は11.6%となった。)

沖縄の2.9%という数値について他国のシェアと比較すると、シンガポール(2.4%)、ベトナム(2.9%)、タイ(3.5%)などASEANの人気観光地と肩を並べる大きな数値である。ただ、同時に、沖縄旅行ニーズの飽和という状況も考えられるであろう。

ちなみに、海路出国者数のシェアについては、海路出国の全台湾人のうち13.0%が沖縄に来ているという結果となる。海路における沖縄のシェアは比較的高い数値となっている。

図表3:台湾出国者における行き先別シェア(2014年)



(出所) 中華民国 交通部より

なお、台湾における出国先は中国、日本、香港の3先が長年上位を占めている。推移をみると、2009年まで20年以上に渡り香港が1位、次いで日本という状況が続いていた。

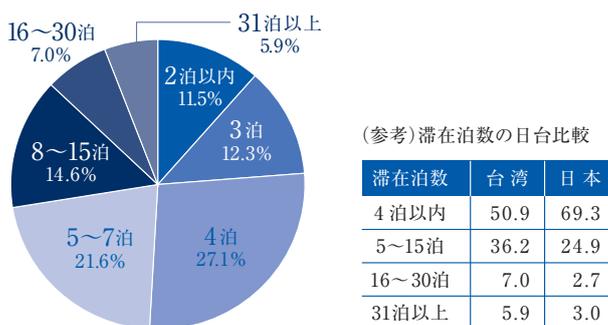
しかし、2008年、台湾-中国間における相互の観光開放を機に、中国への出国数が急増し、2010年からは中国が第1位として台頭している。これにより、出国先として第3位に落ちていた日本であるが、前述のオープン・スカイ協定の締結や、昨今の国策としてのインバウンド戦略の奏功などもあり、2013年からは香港を抜いて第2位となっている。

日本よりも長い滞在期間

中華民国交通部によると、全台湾人出国者における渡航先での平均滞在泊数は、2014年で8.6泊となっている。

滞在泊数の内訳をみると、最も多いのが「4泊」(27.1%)、次いで「5-7泊」(21.6%)、「8-15泊」(14.6%)となっている(図表4)。参考までに日本と比較すると、滞在泊数は台湾のほうが長いことがわかる(図表4、右表)。台湾では、日本と比べて長期休暇などを取りやすい環境があるのだと想定される。

図表4:台湾出国者における渡航先での滞在泊数(2014年)



(参考) 滞在泊数の日台比較

滞在泊数	台湾	日本
4泊以内	50.9	69.3
5~15泊	36.2	24.9
16~30泊	7.0	2.7
31泊以上	5.9	3.0

(出所) 中華民国交通部資料および法務省統計を基に作成

沖縄観光における目標の一つに、観光客の滞在期間の長期化が挙げられる。県の外国人観光客実態調査によると、2013年度の台湾人観光客(空路客)の平均泊数は3.4泊である。内訳では、「3泊以内」が74.3%、「4泊以上」が25.7%となっている。

台湾人全体の滞在泊数に目を戻すと5泊以上の客層は49.1%と全体の半数に上るため(図表4、右表)、台湾人の観光ニーズに訴求でき、かつ滞在の長期化を見据えた観光メニューや多くのコンテンツがあれば、滞在期間の長期化を図ることは可能であろう。

以上の情報から台湾の観光市場を概観した結果、現状の入域観光客数は非常に多いといえる。歴史的な交流があること、距離の近さなどから、今後も安定的な市場とみてよいと思われるが、今後は、滞在期間の長期化を図る戦略がより重要になってくるのではないかと。

(海邦総研地域経済調査部研究員/瀬川孫秀)